

# 山片蟠桃

22211335 保坂亮典

これは山片蟠桃の物語である。江戸時代後期に活躍した。山片蟠桃は江戸時代後期の商人であり学者。播磨国生まれ。名前は、升屋の番頭をしていたことからもじったもので幼名は惣五郎、晩年には長谷川芳秀と名乗る、通称升屋小右衛門。そもそもこの升屋は初代平右衛門が作った。彼は京都で生まれた。そこから大阪に移り、米の仲売人をしてしたが2代目の山片重賢が大阪の大名貸になったと言われている。そこから山片蟠桃に6歳で当主を交代し、わずか60貫目の現銀しかなく、身上投出をしなくてはいけないところまで追い詰められてしまった。しかし彼は努力を惜しまず10年後再興の兆しが見えた。この頃に仙台の相談役となった。仙台は元々財政が悪く、相談役であった山片蟠桃は買米制度や米札制度というあらゆる策を考えた。この結果仙台の財政は一気に良くなり、景気が回復していった。このことを買われ、様々な国の大名と財政関係を持つことになった。このようにして升屋は幕藩体制に寄生する大町人としての立場を確立していったという。ここまでが山片蟠桃と升屋の略歴である。

これは山片蟠桃が賢いという観点はもちろんあるのですが、山片蟠桃は努力に着眼点を置きました。普通の人間であれば、たったの6歳で升屋の当主を任せられたところで何もできるはずがない。ましてや60現銀という少ない財政状態の中10年で復興させてみせたのは尊敬に値するというものを読んでいて感じ取れるものがある。今回自分が見せたいのは山片蟠桃という人を紹介するのはもちろん、山片蟠桃と今の自分とを比較してもらい改めて彼の凄さであったり、今の自分に足りないものを見つけて欲しい。